

# 童

2018年3月16日。

大地の裏山の下から子どもたちの声が響いています。そこは、昨年の4月の慣らし保育の頃に毎日通った場所。そう、オタマジヤクシのいる沼です。ここに、たくさんのかえるの卵が一面に浮いています。その横の小川には大きな沢ガニがいました。そして、周囲にはたくさんのふきのとうが芽を出しています。まさに、1年が廻ってきたという感じ。身体は一回りも二回りも大きくなりましたが、1年前の光景が再びよみがえっていました。

歩き慣れた天神さんへの散歩。いつもの変わらない道を歩きながら、3年前の夕涼み会に初登場して以来、ちょこちょこ顔を出す人魚姫達。子どもも親も以心伝心あたり前として神妙に心躍らせている光景。

天神さんの建物の影から、こっそり七福神の会議や踊りをのぞき見している子どもたち。まるで、昔話に出てくるような光景でした。まさに大人子ども一体の世界、幸せいっぱいの天神さんでした。

「子どもがいるから出来ない」ではなく「子どもがいるからこそ出来る事、出来る時代」それを親子で楽しむことをモットーとしている大地。「子どものため」ではなく「子どもと共に」。子どもたちが、親とは感づきながらも、おとな達の真剣な眼差しや動きに「いや違うんだ!？」と思い、その世界に没頭すること、これがメルヘンとファンタジーだと思います。おはなしや絵本、人形劇などを見て、その世界に没頭することと同じように、大人の真剣さは、その世界に誘います。



そして、何よりの楽しみは、子どもたちの前に立つ事は、ダイレクトに我が子や子どもたちの喜び溢れる眼差しに会える事です。これこそが「子どもがいるからこそ享受出来る親の喜び」だと信じています。おはなしも然りです。

自分の時間を見も知らない人や他人のために使えるのは、人間だけです。そこでは、時間が一番生きて輝き、使えばえがあるものです。そして深い愛しさや喜びがうまれてきます。子どもが愛しいのは、親が純粋に自分の時間を子どもに使うからでしょう。我が子のみならず、大地の子どもたちのために多大な時間を使っただけ本当にありがとうございます。これからも、更に、社会のために、自分の時間を使っていきましょう

## 【座右の書】

老いもも若きも皆同じようにメシを食って生きている。時間も24時間平等に与えられている。だから何か「出来ない」理由を探す方が難しい。それでもうまいかないのは、エネルギーを明確な目的のために使わないからだ。航海と同じで、目的地を決めずに海を渡っていても、いつか燃料が切れて座礁してしまう。エネルギーが残っているうちにまっすぐ進もう。

与えられている時間は誰もが平等。備わっている能力もそれほど違わない。だとすれば勝負の行方は、時間の使い方。時間とは命そのものである。時間の管理は命の管理。相手の時間を無駄にすることは、その人の命を削ること。その意味で、親は、母親は、子育てに命を削っている。(青ちゃん)

緊張と緩和のバランスをとらないと、人間は鬱になる。思い切り遊ぶ時間はきちんと確保しよう。そのためにやるべき事は、自分の決めた時間内に終わらせるように。終わり(ゴール)を意識できるからこそ、現在を濃く生きることが出来る。

しぶとさやしつこさこそ才能だ。知識や技術はあとからついてくる。人生には全てをかける瞬間が何度か訪れる。その時、身を捨てて事に当たれば必ず道は開ける。命がけで、全力で、全身全霊をかけてやるという人間の想いを伝えるには、ある意味「狂気の沙汰」が必要だ。嘲笑されようが、逮捕されようが構わない。土下座し血を流し、何日間も玄関に座り込み、時には「病院に行け」と心配されるほどの愚直なやり方こそが、運命を変えるカギとなるだろう。「身も捨ててこそ浮かぶ瀬もあれ」

絶対にひとりでもやる、出来ると思いつく勇気を持つ。人は支え合って生きているというのは美談だ。でも、それは、誰かに依存することではない。多くの人にとり、周囲とうまくやることが重要課題でありながら、自分のやりたいことを実現しようとしている。もちろん、皆から愛される事は素晴らしい。だが、今より上を目指すものと、博愛主義者は残念ながら一致しない。

時には「そんなことは無理だ」「やるだけ無駄だ」「面倒だ 疲れる」「先送りしよう」と言う人が現れる。もし、彼ら全員の都合に合わせようと努めれば、自分の信念は瞬く間に消耗する。「世の人は何ともいはいへ わがなすことは我のみぞしる」(坂本龍馬) 自分の一番に理解者は自分自身。その自分に嘘をつき、自分に嫌われるのは最大の悲劇だ。

批判や中傷 嫉妬や言い訳など、マイナスの感情を運んでくる人に対しては、せめて気持ちだけでも関係を切りたい。それがどれだけ含蓄のある意見であっても、それはあくまでもその人個人の考え。自分の感情を抑えてわざわざ理解する必要はない。「あなたの言うことはよくわかった。でも私はそうは思わない」そう言って立ち去るのがお互いの今後の人生のためだろう。「それはそれでいいですね。でも僕は違うんです」(イチロー)

何をやるにも情熱がなければ続かない。情熱は周囲の人間を勇気づけ、楽しませ、時には心酔させ、共に未来への促進力となる。でも自分は一体何に対して情熱を持てるのだろうか。その答えは直感だけが知っている。信じるものは自分のアンテナだけ。心動くものは、片っ端から手を出す。何も考えずに挑戦し、情熱を持てるかどうかはやってみないとわからない。いろいろやってみれば、偶然の出会いがあり、偶然の確立をあげるには数をこなす。直感を次々に試す事で、問題意識が芽生え、同時に直感の精度もあがっていくだろう。

難しいことはわかっている。簡単なことなら誰でもやっている。だがみんなにとって難しいからこそ、自分がやってみる価値がある。「頼まれ事は試され事」(中村文昭) 人からの頼まれ事は、あなたが出来るかどうかを試されている事、あなただからこそ期待されていること、出来ない見込みのない人には依頼は来ない と考えて、敢えて難しい、厳しそうだという事を進んで挑戦してみよう という気概で受けよう。

既存の幼児教育において、私が50年前に戻り幼児だったら、とても耐えられるものではありません。小学校の下請け、学歴尊重の早期教育、仕事優先大人のための保育教育業界、その犠牲者となりつつある子どもたちの心の叫び、真の子ども時代の保証、そして、親として子どもを心から愛しくなる親時代の保証、そんな人間 ヒト、哺乳類としての生命の刻みに、大地が少しでも役に立てたらと願い、以上の気概を持ってこれからも進もうと思っています。